

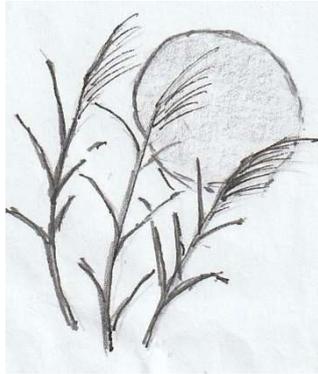
# 芥川だより

発行日 \* 2021年10月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸  
印刷・発行 下村嘉明  
〒661-0951  
尼崎市田能5-3-10-601  
☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*

## 医師の職人技を見る



婆さんに食べさしながら、タンのからみが気になる。咳き込んだり、喉の奥でガラガラとうがいをするような音がしたりする。タン切りの薬が必要だと思い病院に電話する。すぐに薬局に処方箋を送ってもらい取りに行った。しばらくすると熱が出てきた 37.6 度、これでは施設に行けない。

看病していると体温が下がったり上がったりする。飲み込みも悪い。夕方になって病院に婆さんの様態を知らせると、「今日6時ごろに診察に行きます」と連絡が入る。往診を依頼したわけではないが医師の判断であった。

6時前に手術着を着た若い院長と看護師が大きなザックを抱えて来られた。すぐに酸素濃度を測り採血を2度し、婆さんの背中に聴診器を当てて丁寧に音を観察される。看護師さんは手際よく婆さんのパンツを下ろし尿道に管を挿入して尿を取り、リトマス紙のような試験紙で尿の検査。点滴の用意も早い。発熱抑制剤・抗生物質・水分の三本を順次点滴される。部屋が一瞬にしてICU(集中治療室)になった。医師や看護師の交わす言葉も略語で、二人ともあうんの呼吸で動いていて無駄がない。わずか20分ほどで婆さんの発熱原因が分かった。①誤飲性肺炎ではないが、誤飲したバイ菌と白血球が闘っているので発熱やタンが出る。②女性は尿道と肛門が近く尿道からバイ菌が膀胱に入りやすい。尿検査から見ると半々の可能性がある。ただ、誤飲については何もせず自然治癒にまかせる。無駄のない的確な説明とプリンターから打ち出される処方箋と服用方法の説明。

私もICUに入って治療を受けた時の医師たちのテキパキとした動きに感心したのだが、今回も婆さんの様態を聞き往診し急いで処置をしないと危ないと判断された医療スタッフ、必要最小限の医療器具での迅速な検査・治療など全てが新鮮に思った。婆さんが以前通っていた病院とはかなり違っていた。医師は「救急車を呼ばないでください、すぐに来ますから、自宅で亡くなられても死亡診断書は私どもが書きますから、警察を呼ぶ必要はありませんから」と言う。在宅で介護している家族の不安や心配を見事に解決してくれる在宅訪問専門病院は有難い。

## 死をめぐるあれやこれ(800)

石川 吾郎

### まやかしの「財源問題」

記者会見で枝野氏は答えた「それはむろん国債です」記者の質問は「財源は何ですか」というもの。このまやかしの「財源問題」によって、日本の国民の大部分はこの三十年近くの経済的な停滞・デフレ状況に苦しめられ、コロナ禍によって苦しめられている。◆最近目にする金融商品のテレビCMで日本と外国の経済成長のグラフが出る。世界経済が右肩上がりなのに日本の成長は地を這っている。それで外国に投資し儲けようというCMだ。◆日本経済の停滞の原因が緊縮財政だということをはっきりしている。そのキーワードが「プライマリーバランスPBの黒字化」。政府は歳入の範囲でしか歳出をしないというのがこの中身。ここに「財源がない」という詭弁が出てくる。PBを黒字にするため、福祉や医療費をけずり、教育文化予算を削り、インフラ建設を削り、消費税を導入・増税を繰り返して国民を苦しめる。ここに「民営化」を導入し弱肉強食の新自由主義が牙をむいてきた。◆だが、このほど立憲民主党や共産党は総選挙を前にして、財政出動をしてコロナ禍の国民を支える政策を発表した。その記者会見での質問「財源はなんですか」に対して、枝野氏は「むろん国債です」と答えたのだった。まさにコロナ禍に疲弊した国民生活に必要なものは、政府の財政出動による国民救済策だ。◆最近の経済

理論ではデフレのわが国の状況では財政破綻の心配はない。実際に昨年のも額の国債発行でもインフレにならないことで、これが証明されている。貨幣を発行できる国の財政は家庭の経済とは違う。この秋に迫った総選挙では、不正にまみれて緊縮からの転換できない自公政権を追い落とし、野党の連合政府を実現して、国民を救う財政拡大の政策を実行させ、弱肉強食の新自由主義の支配を終わりにさせたい。◆なお「P B黒字化」を言い出したのが、例の竹中平蔵だということは知っておく必要がある。

### 素老人☆よもだ帳 (91)

坂本 一光

◆いらん世話焼く他人の外道ヨイヨイ  
馬に蹴られて死ねばよいアヨイヨイ

思えばこの報道は何だろう。足かけ五年にわたり、元婚約者から母親への金銭問題はどうなったか、お二人のご結婚は多くの国民から祝福されているか等々、週刊誌やワイドショーの自問自答騒ぎが延々と続いている。この間、二人の当事者と、一方の当事者の母親の姿は、何度も何度もテレビや週刊誌などに晒されてきた。しかし、あな不思議、ニュースの当事者であるどころか、ある意味で一番の主役に躍り出たはずの元婚約者は一切姿を見せることがない。暴露趣味旺盛の日本の追っかけマスコミがそのことを是とし、闇に置いたまま触れようとしてない。

宮家の結婚問題がかくも電波をジャックする国。今も、ニューヨークの法律事務所に就職の内定が決まったと言う若者が帰国したこと、記者会見はいつ開かれるか、そこで何を語るか、会見は一人でするかお二人で行うか、宮家を離れるにあたっての一時金はご辞退すると言っており政府は出さない方針、それを決める会議は開かない見通し、もとは税金だから宮家も援助は出来ないだろう、警備費

も私費でとなりお二人の収入で暮らすことになる等々、話題は延々と作られ語られている。放つとけばよい他人の一挙手一投足を暴き、あげつらい、言葉の刃でいじめ倒す。病気になる方が不思議である。

B..お前つら見よ ぼたもち顔よ  
ヨイヨイ  
黄粉つけたら なおよかる  
アヨイヨイ  
A..いらん世話焼く 他人の外道  
ヨイヨイ  
焼いちよければ 親が焼く  
アヨイヨイ  
B..いらん世話でも ときどき焼かにか  
ヨイヨイ  
親の焼かれぬ 世話もある  
アヨイヨイ  
A..ねんねねんと 寝る子はかわいい  
ヨイヨイ  
起けち泣く子は つら憎い  
アヨイヨイ  
B..憎みやしませぬ 大事にします  
ヨイヨイ  
伽じやとぎじやと 遊びます  
アヨイヨイ  
A..山が高(たこ)うち 在所が見えん  
ヨイヨイ  
在所かわいや 山憎や  
アヨイヨイ  
B..ままになるなら 在所を山に  
ヨイヨイ  
山を在所に してみた  
アヨイヨイ

### 芥川だより一七七号 目次 ページ

|                  |       |    |
|------------------|-------|----|
| 巻頭エッセイ           | 下村嘉明  | 1  |
| 巻頭コラム 83         | 石川吾郎  | 1  |
| 素老人☆よもだ帳 91      | 坂本一光  | 2  |
| 哲学叢いの時事放談 41     | 祖蔵哲   | 3  |
| 大峰奥駈道 47         | 下村嘉明  | 5  |
| 新型コロナウイルス愚考 (18) | 明石幸次郎 | 5  |
| オクラの山たより 61      | 因了生   | 6  |
| 隠された歴史 36        | 満田正賢  | 10 |
| 道をゆく 30          | 成瀬和之  | 13 |
| マルクスから学ぶ (8)     | 成瀬和之  | 14 |
| 俳句               | 土田裕   | 15 |
|                  | 影山武司  | 15 |
| 編集後記             | S K生  | 15 |
| ふみの道草 40         | 山椒魚   | 16 |

♪ あん子つら見よ 目は猿まなこ  
ヨイヨイ  
口はわに口 えんま顔  
アヨイヨイ  
いらん世話焼く 他人の外道  
ヨイヨイ  
馬に蹴られて 死ねばよい  
アヨイヨイ  
何だ、それは。これは大分県南海部郡  
宇目(うめ)町(現在は佐伯市)に伝わる民謡で、「宇目の唄げんか」として知られる子守唄である。以下に歌詞と解説を紹介する。(NPO法人日本子守唄協会) HPによる)

【解説】  
A、Bは川向こうと河のこちら側のそれぞれのグループで、相手側の子守娘の

悪口を交互に掛け合っていく唄。お互いに、日常のストレスを発散するのに役立っていたようで、「唄げんか」をしている子守娘同士は本当に憎悪し合っているわけではなく、罪悪感も持っていなかったとかんがえられる。

現在全国的にも知られる、この「宇目の唄げんか」は、元々「宇目の子守歌」として地元で伝わっていたもので、それが大正時代に問答形式に仕立て直されたという。

\*\*\*\*\*

さて、この唄には、地方ごとに幾つものバージョンがある。素老人の手元にある、大分県宇目町役場企画・一九九五年キングレコード発売シングルCD「正調宇目の唄げんか」の歌詞はこうだ。

ねんねねんねと ねる子は可愛  
起きて泣く子は 面にくい ヨイヨイ  
面が憎けりや 田んぼにけこめ  
あがるそばから 又けこめ ヨイヨイ

あん子面見よ 目は猿まなこ  
口はわに口 えんま顔 ヨイヨイ  
お前面見よ ぼたもち顔じゃ  
黄粉つけたら なおよから  
(あん子・あの子)

いらん世話やく 他人のげどう  
やいち良ければ 親がやく ヨイヨイ

いらん世話でも 時々ややかにや  
親のやかれん 世話がある ヨイヨイ  
(いらん・いらぬ、やいち・焼いて、  
やかれん・焼かれぬ)

わしがこうしち 旅から来ちよりや  
旅の者じやと 憎まるる ヨイヨイ  
憎みやしません 大事にします  
ときじやとぎじやと 遊びます  
ヨイヨイ  
(こうしち・こうして、とき・友だち)

旅の者じやと 可愛がつちおくれ  
可愛がらるりや 親と見る ヨイヨイ  
可愛がられち 又憎まるりや  
可愛がられた 甲斐がない ヨイヨイ

私や唄いとうち 唄うのじやないが  
あまりつらさに 泣くかわり  
ヨイヨイ  
あまりつらさに 出ち山みれば  
霧のかからん 山はない ヨイヨイ  
(唄いとうち・唄いたくて)

このCDの解説 — 「宇目の唄げんか」は徳川時代のころから唄い伝えられているもので、その昔、村里の娘たちは、年季奉公をするものが殆どで、子守として朝早くから夜遅くまで、乳飲み子を背負わされ追い使われていました。  
迫りくる夕やみのわびしさ、一日中おぶっている子供の重みは肩に食い込み、

背中の子供は母親の乳房恋しさに泣きじやくり、その泣き声に自分も半ば泣きたくなる毎日でした。

そのやり場のないうつぶん、悲しみを唄に託したのがこの「宇目の唄げんか」です。

この唄は、一般にうたわれている子守唄と違い、お互いが送り返しの文句でうたい合っているのが特徴です。

一人の子守娘がうたいだすと友達の子守娘がかけよって応援する。いつ、どこで、何人であうたうという決まりはなく、小川や道をはさんでうたい合い、歌詞のきれた方が負けになるしきたりになっています。

その歌詞をみると、哀調のあるメロディとは逆に即興的できびしい反発がうかがわれ、子守娘のせつない気持ち素直に表されています。この切々と流れる哀愁のしらは、人々の胸を打たずにはおきません。

「宇目の唄げんか」は、大分県の代表的な民謡として、知られています。

さてさて、先の結婚問題の一方で、この一カ月ほどはまた、政権党の総裁選びというテレビジャック事件があった。毎度のことではあるが、宮家とは言え他人の結婚問題を、また政権党の、とは言え一党の総裁選びを騒ぎ立てるマスコミ。唄でけんかもしたくなる。  
いらん世話焼く 他人の外道

馬に蹴られて死ぬばよい ヨイヨイ  
こんなことでもいいのかと素老人、一日中不機嫌。

(かたちは心であり、心はかたちになる)  
■大分の素老人

## 哲学命いの時事放談(41)

祖蔵 哲

### ノーベル賞の哲学

6月下旬頃から始まった新型コロナウイルスのいわゆる第2波は、全国では8月20日に過去最多となる25,851人の新規感染者数を記録し、それ以降最近では減少に転じてきている。7月中旬から緊急事態宣言が発令されたにも関わらずオリンピックが7月23日から開催された影響からか一向に感染者は減少せずに経過してきた。しかし、過去最高の感染者数に医療崩壊の始まりが音を立てて迫ってきたのかさすがに外出や移動に対する行動変容が起きたのか、またはワクチンの接種効果か今のところ減少傾向にあるのは事実である。しかし、新型コロナウイルスはその流行ごとに主役のウイルス株が入れ替わって

いる。第4波はアルファ株が中心で、そのリバウンドが起こりかけたすきをついてデルタ株が急拡大し第5波を形成した。では、この冬にやってくると思われる第6波は、どんな様相を呈するのか誰も予想はできない。ただ言えることは今のところはそれに備えるだけである。

さて、このコロナとオリンピックの騒動に乗じて政局が一举に変化した。前総理と同様今回の首相もその失策の責任を認める前に政権を投げ出してしまったのである。説明も責任も共にならない政治が引き続き行われている。そして、この新型コロナウイルス第5波下降期の安心期に乗じて新政権を発足させようという魂胆である。オリンピックといい、コロナといい、利用できるものは何でもありという無節操な政治が信頼を得ている不思議な国である。

### (1) ノーベル賞と国籍

なんでも利用するといえは、今しがた「日本人」ノーベル賞受賞のニュースが入ってきた。

そう言えば、毎年10月はノーベル賞シーズン、何かと「日本人」の受賞が話題になる。昨年は該当者がいなかったのに盛り上がらなかったが、今年は早速、新政権はさも自分の業績であるかのよう祝福のメッセージを発表した。果たしてそうかどうか疑わしい。ノーベル物理学賞受賞が決まった米プリンストン大上席気象研究員の真鍋氏は現在アメリカ国

籍の「アメリカ人」である。現在の日本は「二重国籍」を認めていない。だから、真鍋氏は従前たる「アメリカ人」である。

「二重国籍」といえば、4年前の1017年某野党国会議員が台湾の国籍を残したままで日本国籍を取得していたとして問題になった。その時、政権はその議員を「日本人」とは認めないという態度であった。今回のケースは明らかに「米国籍」の人を「日本人」と呼んでいる。大いなる矛盾である。この理屈でいくと、何らかの理由で外国から日本にやってくる日本国籍を取得した人は日本人でないことになる。ここに日本独特の未だ閉鎖的な国家観が存在している。

また、さらに問題なのは真鍋氏をはじめ過去の受賞者の米国籍への変更理由である。全員が日本の基礎研究への資金支出の少なさと日本の「個性軽視」の文化風土を挙げている。いわゆる「頭脳流出」はアメリカへだけでなく、仮想敵国とされる中国にも向かっている。研究職のポストも資金も少ない日本では満足に力が発揮できない。さらに「学術会議指名問題」にみられるように政治の介入は自由な研究風土の妨害になっている。その結果、自然科学系で数多く引用されるなど注目度の高い上位10%論文数の最新国別ランキングでも、日本は20年前と比べ4位から中国、インドにも抜かれ過去最低の10位に低下している。

経済と同様、学術研究においてもその

国際的地位が低下している日本。それを反映して精神論でしかない「美しい日本」とか「クールジャパン」とかといった自己賛揚ブームが続いている。そしてなんでも「国別ランク」によって表面的にだけ都合よく比較してしまう。オリンピックも然りである。

### (2) 私とは誰か

オリンピックでもノーベル賞でもなぜ日本は「個人の業績」を「国家」に還元してしまうのか。これは先月号でも話したが、「個人のアイデンティティ」の問題でもある。私はどこに所属するのか、突き詰めていけば「私とは誰か」になる。

しかし、いくら自分を掘り下げてみても「私」は見つからない。日本ではまだ本当の「自我」というものが確立されていないので「個人」は不安になる。そこで気づくのは私とは「他者」から見たもの、つまり他者が認識している私、「他者関係」が本当の私ではないかと思ってくる。しかし、他者関係といっても「他者」は様々である。つまり関係自体も複数存在することになる。すると「私」もそれに合わせて複数存在することになるのであろうか。「自我」というものが確立されていれば、本来はここで「多様性」概念で複数性を認めるのであるが、そうでなければますます一つの自分を探し始める。そこで「民族」や「国家」という所属が持ち出されるのである。

オリンピックやノーベル賞は個人の努力の結果が非常に多いにも関わらず「国家」が容易に持ち出されるのは「関係」と「帰属」の問題である。つまり、そのような優秀な場に帰属している自分もまた優れているという錯覚である。本来、国家と個人の関係は単なる契約でありそれは形式的なものである。だから、世界の主流は「重国籍」を認めている。つまり「多様性の尊重」である。しかし、日本はそれを認めていない。だから今回のケースの場合でも「形式的国籍」である「米国籍」は無視しているのであろう。何代前かの祖先が日本で住んでいて、たまたま日本で生まれ育っただけの「事実」だけが、その後の他国での本人の「業績」という「価値」よりも優先されている。まったく「個人」「私」を軽視する「美しい国」である。

さて、今月は先月号の「多様性」というテーマを引き継ぎ、「尊厳」を哲学する予定であったが、改めて「尊厳」を学ぶうちに自明であると思っていたその概念の深さに行き詰ってしまった。今回は少し横道に逸れたが、引き続き哲学する。

下村 嘉明

秋の夕暮れは、そこはかとなく寂しいものだ。歳を重ねるにつけ、裏悲しさが心にしみる。寝てみる夢も亡くなった友人や家族が多くなる。かなしいかな若い娘が出てくることはめつたにない。自分が老いぼれていく過程とあきらめてはいが何とも言えない無常感が己を包み込むようだ。

大した夢や計画があるわけでもなく、ただ毎日を過ごしているに過ぎないと思ふとやるせなさがさざ波のように押し寄せてくる。老いていく人は、似たような想いで生きているのだろうと想像するのだが、唯我独尊の言葉を思い返し「己にしか生きられない生き方をしよう」と叱咤する。

自分の生活を律し、周りにある身近なことを精一杯することによって、生きがいとし、人生の光にしようと試みるのだが、なかなか至難の事だと気付かされる。体調も日々変化するし気持ちの迷いもままならない。

先人たちの偉業を思うにつけ、あらためて先人たちの苦勞と努力に驚かされる。若かりし頃には思いもよらなかった事が、この歳になって初めて分かり始めた。疲れを知らない身体で山々を駆け巡り腹一杯食って熟睡し翌朝また駆け出していく。

今から思えば夢のようで、とても自分がしていたとは思えない。

しかし、困ったことに変なプライドだけは消えずに残っている。自分はあれやこれやの事をやってきたのだ。普通の人以上なら経験できないようなことを周りの人の助けでさせてもらったのだ。有難い事なんだ。少しぐらい老いたからと言って、言い逃れは出来ないんだ。世話になった分の一部でも恩返しが出来たのだろうか。

いやいや何もできてない、そうじゃない結構社会に貢献してきたよ、という想いが反復する。そもそもそんなことを考える必要がないのかもしれない。自分に問いかける、偉い人の真似をしたいのか、自分の事すら満足に出来ないくせに。自分の人生には何も意味などありはしない。独り生まれて独り死んでいく。生き物の宿命から逃れられないものでしかない。大きな流れの中で偶然が重なりたまたま今の自分の姿があるのであって、次の瞬間には形を変え目に見えないような粒から原子へと流れていくと想像すると、自分が大きな宇宙の流れの中に一瞬現れた姿が今の自分で幻と変わらないじゃないかと思えてくる。

般若心経が多くの人々に唱和されるのも、宇宙的な視野から人の生き方・考え方を説いているからだろう。「色不異空空不異色 色即是空 空即是色」の言葉は見事に我々の迷いを喝破していると思う。色は見えるもの、空は見えないが有る

もの、目には見えないが科学的には素粒子や原子などが存在します。この世界を構成しているものを突き詰めて細分化していけば目には見えないものになります。この見えないものから私たちを含めた全てのものは出来ている。その見えないものが大きな流れの中で形を変えながら宇宙を飛んでいる。私が死んだらしまいに姿も見えない小さなものになって飛び回り流れていくわけです。そもそも目に見えるようなものは最初から存在していないわけですから、形が如何様に変化しようとも悲しんだり喜んだりする必要はないと般若心経は説いています。

この世界の森羅万象を起こしている見えないものに対して畏敬の念を忘れず、日々修行に励み自分の生きがいを見出す修験者が般若心経を唱えるのも理解できる。人生には、決まったことなど何もない。意味もない。自分が生きがいを見出し人生の意味を見出すのだ。と私は、勝手に解釈しているのです。よろけそうになっても、周りからバカにされようとも、自分が生きがいを感じてやり続けると決めたらとことんやり続ける。運が良ければ、大いなる自己満足の世界を一瞬だけでも味わえるかもしれないというはかない希望を持つてやるしかない。

政府は繰り返し宣言を発令し、又、解除し、その度にNHK7時のニュースで会見と称し菅さんが虚ろな目で原稿を読みながら、時々、顔を上げて説得力のない言葉を発していました。又かと、ここ2年、自粛、解除の繰り返しで、その度に閉塞状況のマンネリ的な気分が続いています。

明石 幸次郎

10月1日に緊急事態宣言が解けましたが、大阪はまだまだ、コロナ感染者200人を前後して、東京よりも感染者が多い日もあります。

解除が解ければ、解放感で、ワクチン接種が低い若者が街に繰り出し、飲んだり歌ったり、愚痴をお互いにこぼしたりしたら、今度は第2波の感染拡大が起こるかもしれませんと専門家は、それへの警告を発しています。

ここ一ヶ月位は政局が動き、菅さんが総裁選の再選を狙った行動が、安部、麻生の実力者の積極的賛同を得られず？その結果、「負ける戦はしない」と言えば良かったのに「総裁選とコロナ対策とは両立出来ないの、任期中はコロナ対策に専念する」と菅さん流の説得力のない言い訳を言って、総裁選を降りてしまいました。

このような政局の中、コロナで心も仕事でも追い詰められコロナ鬱と言われる症状を抱えた人が増えているようです。

先月号でも書きましたが、電話相談でも外出制限、リモートワークでの慣れない仕事、家での三密、コロナでパート、非正規社員で仕事が減るとか無くなるといった苦しい状況は特に女性にしわ寄せが来ているようです。

女性は仕事、育児、家事全般に引き受けるとなると住宅環境の良くない家庭では、女性は逃げ場がなくなります。その上、夫もリモートワークとコロナのストレスのはけ口で自分と子供に当たり、暴力をふるうまでになって追い詰められ、どうしようもないと言う電話もあります。特に経済基盤の弱いシングルマザーの生活苦、精神的苦悩の大きな負担が掛かってきて悲鳴をあげています。

ところで、鬱の発生と自殺に関しては、一般的には女性は男性の2倍くらい鬱になりやすいと言われています。これは、どの国でもほぼ共通していますが、女性の自殺者は少なく、日本では大体、男性の方が2倍くらい多いようです。又、日本は先進国で一番自殺者が10万人に15.7人と多いと言われ、二番はフランス15.1人、次はアメリカ、ドイツとなっています。

ところが、今回、コロナ禍が深刻化した以降に限って言うと男性の自殺率の増加に比べて女性のそれは顕著な増加を見

せました。警視庁発表では、10年連続で減り続けていた自殺者は、2020年には前年比912人増の2万1081人(4.5%増)。

男性は僅かながら減ったのに対し、女性は885人も増えて6,976人になりました。男女とも年の後半から前年同期を上回るようになりましたので、コロナと自殺増加の因果関係は明白であると言われています。特に、コロナにより打撃を受けた産業と関連ある非正規従業員の女性の自殺が増えています。

又、コロナ前は鬱になりやすい女性の自殺率が低かったのは、女性は横のつながりが比較的豊かで奥さん同士のネットワークで、夫の悪口を言いあったり、悩みを相談しあったり、男性に比べれば、援助希求の回路がいろいろありました。それがコロナ禍で断ち切られてしまい、家庭に閉じ込められ、家族の世話に専念せざるを得ないのと同時に非常に孤独感を深めることになって、そういった環境が女性の自殺に拍車をかけたのではないかとも言われています。

自殺には、コミュニティ特性が大きく影響し、日本国内でも大きな地域差があるようです。日本で一番自殺者の少ないところは、徳島県海陽町だそうです。そのコミュニティ特性を調べたら、「絆が弱く」隣近所が普段から密に繋がるのではなく、何かあると手を差し伸べるといふスタンスです。地形的に路地が多く、家の前などにベンチ(椅子)があ

ちらこちらにあり、座りながらの交流があつて、そこで、困り事の“小出し”の習慣があり、加えて、人を地位、学歴で評価しないで「他人は他人、自分は自分」という多様性の容認、援助希求行動に対する抵抗感が低いとのこと。それと、割と気楽に行政や病院に助けを求める傾向も見られ、鬱の受診率は周辺の自治体の中では最も高いと言われ、これらは悩んだり、困ったりしたら、問題の早期開示(自分だけで問題を抱えない)が促されているという特性があるとのこと。問題を他人に開示しやすい環境と風土があるということが自殺の抑制に繋がっているようです。

何れにせよ、自殺予防要因は経済問題が一番だと言うことを改めて、為政者は意識して、対策を立ててほしいものです。



## オクラの山たより (61)

困了生

一

一七七六(安永五)年九月、蕪村編「芭蕉翁付合集」が出版されます。時に蕪村は六十一歳。この年の暮れには娘の結婚を控え、蕪村の周辺には忙しい中でも明るい気分が漂っていた頃でしょう。

この芭蕉の「付合集」は「芭蕉俳諧七部集」などから芭蕉の付合を抽出して、覚えやすいように編集したものです。

「付合」とは、連歌や連句で前の句に付ける付け句を作ることです。または、その前の句と付け句の一组をいう場合もあります。前の句が長句(五・七・五)であれば付け句は短句(七・七)であり、前の句が短句ならば付け句は長句となります。

連句とは「俳諧の連歌」の別称です。連歌の最初の句が発句(はつく)ですが、この発句が「俳諧連歌の発句」を略して「俳句」とよばれるようになった明治以降、独立して作られるようになり、俳句や連歌と区別するために用いられるようになった語です。要するに連句とは五・七・五・七・七の発句から始められ、五・七・五の長句と七・七の短句を一定の規則に従って交互に付け連ねるものの名称です。

この「芭蕉俳諧七部集」に蕪村は序文を寄せていますが、研究者の意見では編

集に杜撰なところがあつて蕪村がどこまで関わったか不明だそうです。しかし、序文は間違いなく蕪村の筆になるものですから紹介します。

### 俳諧の継句（つぎく 付句のこと）

を学ばんにはまづ蕉翁の句を暗記し、付け三句のはこびをかうがへしるべし。三日翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし。

「蕉翁」とは松尾芭蕉のこと。「付け三句のはこび」とは二つ前の句、前句、付句の三句にわたる付合の運び方のことです。「むばら」とは「イバラ」のことで、芭蕉の連句の句を三日でも唱えないと口の中にイバラが生えてくるだろう、といっています。蕪村は俳句（発句）の名手とされていますが、連句でも「結構イケテル」という自負を持っていたらしく、その蕪村が連句の御手本としたのが芭蕉の連句です。いうまでもないことですが、蕪村が芭蕉への傾倒ぶりは相当なものでした。蕪村に

芭蕉去りてそののちいまだ年くれず

という句があります。芭蕉翁が亡くなったから、その後いままで、年暮れて、そして本当の意味で新たな年が来たということとはなかった。芭蕉翁去つてのち芭蕉翁なし。ただ年だけが空しくやつてきて

は、去つて行くのみ、という句意です。

この句は芭蕉の「年暮れぬ 笠着てわらし はきながら」を踏まえたものです。この芭蕉の句には倦まずたゆまず新たな境地を目指し俳諧にいそしんだ芭蕉翁の生き方が示されているのですが、当時、芭蕉の流れをくむ俳人たちは、その足跡を慕おうとはせず、門流のしがらみにとらわれているだけでした。そこからは何の新境地も生まれてはきません。それでも芭蕉の流れをくむ者か、なさけない。そういつたいらだちが蕪村にありました。この安永五年、蕪村は荒廃していた洛北金福寺にあつた芭蕉庵の再興に向けて動き出します。

## 二

さて、蕪村が敬愛した芭蕉の連句ですが、そこには俳句（発句）からだけでは見ることのできない芭蕉の世界があります。芭蕉の俳句ではまず見られない艶やかな世界、つまり色恋の世界です。

文学の題材として愛情・恋愛などが最もポピュラーであることは古今東西を問いません。日本古典文学の主流であつた和歌もその中心は実は恋歌でした。この流れが連歌の中に流れ込み、そして俳諧（連句）の中にも伝わってきたのでしよう。このため俳諧（連句）の中には必ず恋句が入っていなければならぬとされ、恋句が一句でも入っていなければ「はし

た物」とされ、半端なもの、不完全なものともみなされました。

なぜ、俳諧（連句）に恋句を入れなければならぬか。門人に問われた芭蕉の答えが「三冊子」にあります。その理屈がおもしろい。

この事は至つて大切の事なり。懐紙に恋を目立たす事、神代の会合より日本はじまるの例なり。恋なくては詮なき事なり。つつしむべし。」

どうして俳諧（連句）に恋句が必要なのかという問いに対して、日本の国はイザナギ・イザナミの二神の出会いと互いの愛によつてひらけた国だから、恋句を詠まなければならぬのである、と。これは屁理屈というべきで答えにはなっていない。こんな理屈を芭蕉が信じていたとは思えません。俳諧（連句）に恋句を入れるという決まりを芭蕉が忠実に守っていたのは確かです。その芭蕉の恋の句の実際をわずかな例ですが、若いころから順次見て行きましょう。編集の都合上、前句とそれに付けた芭蕉の句という形で紹介していきます。

まず、最初は一六七七（延宝五）年後、芭蕉三十四歳頃の作です。この時、芭蕉は俳諧の道に精進していた一方で江戸の水道工事の書記役もやっています。まだまだ一本の道にたどり着けていなかったときです。

① 君ここに紅の二布の下紅葉 信章

契りし秋は 産妻なりけり 桃青

（延宝四年「此梅に」百韻）

② 寺のぼり思ひそめたる衆道とて 信徳

みじかき心 雖で肩つく 桃青

（延宝五年「あら何共なや」百韻）

③ むつ言の気兼ねの蚤の這ひ出でて

似春

釈迦に添寝の 夢の短か夜 桃青

（延宝六年「のまれけり」の巻）

①の「紅（もみ）の二布（ふたの）」とはべに色で無地に染めた絹。「二布」は並みの幅の二倍の布で製することから出た語で女の腰巻きのことです。女の腰巻きが下紅葉のように裾からその真紅がのぞいている。女性の艶っぽい姿ですが、それに惹かれて契りを結んだその秋には、はやくも産妻（うぶめ）「産女」とも書く、すなわち子持ちの女になっていたという艶笑句を付けたのが芭蕉です。信章とは目に青葉 山ほととぎす 初鯉

の句で有名な俳人山口素堂。蕉風確立の際の協力者でもありました。

②の句の「衆道」とは「男色」、つまりボーイズラブのこと。初めて寺のぼりをした児（ちこ）を見そめて、その愛情の

誓いとして高ぶる気持ちを抑えきれず短気にも雖、ここでは書類を閉じる千枚通しのことですが、それで肩をつついて見せたという句です。

③は蚤がむつみ合う二人の会話に気兼ねして逃げ出すという前句に対して、その「きがね」を「黄金」としゃれてとり、芭蕉は釈迦を付けています。仏の肌を紫磨黄金（しまおうこん）というそうで、釈迦に添寝をして愛し合う二人が夢を結ぶ短（みじ）か夜の睦言に蚤が気兼ねをして逃げていったという艶笑句です。

「もみの二布」「衆道」「睦言」といった語を用いた句を見ると「わび」「さび」しか知らぬ人からみたら「これが本当に芭蕉なの？」と言いたくなるほどですが、考えてみれば芭蕉は「好色物」の井原西鶴と同時代人なのです。西鶴の作品が享乐的で好色的であった近世の町人世界の実体を活写しているものであったとすれば、三十年代半ばの芭蕉もその世界に生きている人間として十分に「元禄の人」としてその時代の空気を吸いつつ自分の俳諧の世界を作っていたということでしょう。芭蕉はこうした艶笑句から出発してさらに高い高みへと進んでいくこととなります。

### 三

一六八四（貞享元）年八月、芭蕉は「野ざらし紀行」の旅に出ます。この旅の途

中の名古屋で土地の青年俳人を連衆として「芭蕉七部集」の第一集「冬の日」の巻々を興行しました。この「冬の日」が遊びの俳諧を脱皮して芸術としての俳諧、つまり蕉風のはじまりであるとされていきます。その地は名古屋のテレビ塔のちようど真下あたりであり、その地には「蕉風発祥之地」という記念碑が建っています。それはさておき「冬の日」に次の句があります。

④ 床ふけて語ればいとこなる男 荷兮  
縁さまたげの 恨み残りし 芭蕉

遊郭に囲われた遊女が初会の男としみじみ語り合ってみれば、客は意外にも自分の従兄弟にあたる男であり、二人はもと一緒になるはずの仲であったのに、妨げとなる人、または事情があつて添えなくなつたという内容の句です。艶笑句という句ではなく、人情ものの落語を聞くような内容となっています。アツと驚くドタバタ喜劇のようなシーンを見事にしんみりとした趣向へと転換しています。みごとです。

さらに翌年の貞享二年三月、江戸に帰る途中の芭蕉が土地の門人叩端・桐葉の二人とで巻いた歌仙の中に次の句があります。スタートの発句は「何とはなしに何やらゆかし葦草 芭蕉」でした。

⑤ 芸者をとむる 明月の関 桐葉

面白の遊女の秋の夜すがらや 芭蕉  
この句は秋の明月の夜、ある関所で通りかかった芸人を風流人が家に泊めて月見の宴を催したが、そのとき、遊女の芸のあまりの面白さに、興は一晩中尽きることはなかった、という内容です。

「芸者」は芸妓とは違い中世以来つかわれてきた遊芸の達者の意味で、たとえば、能役者・連歌師・狂言役者・俳諧師・音曲師・曲芸師などがすべて含まれます。「芸者」が芸妓と同義となつたのは近世中期（十八世紀後半）以降のことです。また⑤にある「遊女」は注意すべき語

です。中世から江戸前期にかけての「遊女」は広い意味を持った語であり、中世以前の「遊女」は近世以降の遊郭に抱え込まれた女性たちとは違って、遊行女婦（うかれめ）、傀儡女（くくつめ）、白拍子など、歌舞により人を楽しませ、時には枕席にも侍った女性のことをさしています。この句における遊女は中世的な風韻を持った謡曲のような雰囲気もありますので白拍子ととればいいでしょう。

なお、この句の「遊女」を遊行女婦の一形態である「田舎わたらいの女芸人」とした柳田国男はこの⑤の句について次のように書いています。

これなどもまた確かに群れて旅行く女たちの生活であつて、静かにその歌声に聞き入った人々の背後に

は、秋の夜明けの白々（しらじら）とした東雲（しのめ）が、もううそ寒く近寄つて来ている感じがする。こういう人生の片隅の寂しさをも、見落とさなかつたのが我が翁（おおう）と読み芭蕉のことをさす）の俳諧であつた。

柳田国男「遊行女婦のこと」  
岩波文庫「木綿以前のこと」所収  
芭蕉の連句を熱愛し詩人でもあつた柳田国男らしい句のとらえ方であり、文章です。

### 四

一六八九（元禄二）年三月二十七日、この日に芭蕉は同行の曾良と半年に及ぶ大旅行に出発します。その途中のあちこちで土地の人を連衆にして俳諧の興行をしています。最初の地は四月三日に到着した那須の黒羽でなされました。この作品の中での芭蕉の恋の句を披露すると

⑥ あのも恋ゆるゑにこそ悲しけれ 翠桃  
露とも消えぬ 胸の痛きに 芭蕉

「露とも消えぬ」は「露のように消えてしまえ」の意。いうまでもなく消えてしまえという対象は自分の命で、叶わぬ恋に張り裂けるように胸が痛むからだというのです。胸が痛むのは女性のように芭

蕉は悲恋の女性になった気分でこの句を作ったのでしよう。それにしても若い人ですら赤面するようなロマンチックな句です。芭蕉にはこういう面もあったことは記憶していいことでしょう。

⑦ ある時は蟬にも夢の入りぬらん  
楠の小枝に 恋をへだてて

蟬の声を聞きながら寝入ってしまうと私は夢の中で蟬になったのだろうか。いくら私が鳴き立てても樟の小枝が邪魔をして恋する私の思いが相手の雌の蟬に届かないのだ、といった句意です。「蟬の夢」は「莊子」の「胡蝶の夢」の故事からの俳諧化です。芭蕉が蟬という虫にまで恋心があるのとらえている点はおもしろいところです。この蟬の句を作ってから一ヶ月後の五月二十七日には山形の立石寺で

閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声

という名句を作っています。「さび」と「細み」の典型を示して芭蕉の絶唱の一つとされています。しかし、この句があまりにも有名になりすぎたために蟬の声に恋する思いの切なさも芭蕉は聞いていたということが忘れ去られているのは残念なことです。

さらに七月末に芭蕉は山中温泉に行き、ここで腹を病み伊勢長島に直行する會良と別れることとなりました。その饒別の意味で巻いた句に

⑧ 遊女四五人 田舎わたらひ  
落書に恋しき君の名もありて 芭蕉

があります。田舎をめぐり歩いて世を渡る四五人の遊女が、或る夜、泊った宿の落書きの中に、ふと懐かしい人と同じ名前があるのを見つけた、という句意です。この句の中の「遊女」も遊郭に抱え込まれた女性ではなく旅を続ける遊行の女性芸人だっと思われまゝ。懐かしい恋人の名前を発見した遊女はそれに対して驚きの声をあげたか、思わず泣き伏したか、さまざまな反応をしたにちがいありません。この遊女たちは「田舎わたらひ」という語からすると、かつては都あたりの女性だったらしく考えられ、「恋しき君」も都にいた若いころの恋人らしく思えます。今さら恋人の名の落書きを見つけても今の境遇に特段の変化をもたらすわけでもないのに、やはり懐かしく思うのは明日に希望のもとぬ身の上からでしょうか。「君の名もありて」と突き放して述べることで読む人の心をグツとつかんでいます。具体的な情景や心情はすべて読者の

の想像にまかせ、表面上はただ落書きがあった客観的事実だけを芭蕉は前の句に付けます。これこそが俳諧（連句）であり、芭蕉の付け句の余韻が深いと称賛される所以なのです。

「落書に恋しき君の名もありて」の初案は「こしばりに恋しき君が名もありて」でした。「こしばり（腰張）」とは「壁や襖や障子などの下の方に紙をはるること、または、その紙」のことです。「腰張にする公家衆の文」という言葉があるように書簡などの反故紙が「腰張」には使われました。時代劇のセットでよく見られました。「腰張」は当時どこにでもよく見られました。しかし、これでは遊女のみじめさ・あわれさが表現しきれません。やはり旅する遊女たちが泊る宿は壁だろうが障子だろうが所かまわず落書きしてあるような安宿でなくてはいけません。芭蕉はこの点に気づいたのでしよう。

## 六

蕪村が三日の間、芭蕉翁の俳諧（連句）を唱えなければ口の中に「いばら」が生じると言った芭蕉の連句の一端を紹介してきました。艶笑句から人の世の片隅にあつて人の心を揺り動かすものまでみてきました。「芭蕉七部集」を愛読した

柳田国男は芭蕉が登場する以前の俳諧を笑いを中心とする文学とみた、その上で次のように言っています。

元禄の俳諧の大きな働きは、独り旧来の俳諧の活用であつただけではなく、同時にまた連歌を若返らせたことであつた。一方にただ上品で艶（つや）も香気もなく萎（しな）びていたものと他の一方には活気はあるけれどもただ騒々しい翫間式の芸術とを、二つほどよく配合してそこに詩情を托せんとした、新しい試みにあつたかと思う。それがあの当時の人心を風靡したのも、要するに以前の笑いの文学には全然見られなかったしんみりとした常人の感情、殊に笑いとは対立する憂いと哀しみとかが、自在に到る所に盛られるようになった（ことである）。

柳田国男「生活の俳諧」

岩波文庫「木綿以前のこと」所収

この柳田の言葉が当たっているかどうかはともかくおもしろい指摘です。念のため一言すれば、この指摘は連句に関するものであつて、俳句（発句）に関するものではありません。同じ「生活の俳諧」で次のように述べています。

発句からまず人を笑わせようとするような連句というものは一つだつてない。これはいかなる突拍子もない話しか家でも、高座に上った早々からおかしことをいう者がいないと同じで、むしろ最初はさりげなく、やがて高調し

てくる滑稽を予想せしめただけでよいのであった。

七

このように述べた上で柳田国男は次のように言い切ります。

だから発句ばかりを引き離してみれば、いずれも生真面目（きまじめ）で格別笑いたくもないのが当たり前……。

香気漂う伝統的な美意識を保ちつつ庶民の笑いも含めたさまざまな感情をも取り込んでいくこと。蕪村が取りつかれた芭蕉の連句の魅力はそのあたりだったのかもしれない。しかし、この連句も蕪村の生きた天明期を境として江戸後期には発句の会が盛んとなりその政策は敬遠されるようになり。小林一茶にも連句はありますが、伝存するものを見る限り、前句に付ける付け句の味わいも平板かつ粗雑で作品として必ずしも整っているとはいえません。

つまり、俳諧（連句）というものは、芭蕉、蕪村、そして一茶へと続く俳諧（連句）の歴史において、その見るべきものはせいぜい蕪村までであり、それ以降のものは、芭蕉の俳諧（連句）を越えるような筆者のような素人にも鑑賞に耐えうる作品は、ほとんど存在しないということがいえるのではないのでしょうか。正岡子規が発句をもって俳句とし連句を切り捨てたのにはそれ相応の理由があったのです。

もはや蛇足でありましょうが、筆者の好みで選んだ芭蕉の連句、それも恋の句をいくつか紹介します。

⑨ さまざまに品かはりたる恋をして

凡兆  
浮世の果ては皆小町なり 芭蕉

元禄三年「猿蓑」所収

句意は女性はみな若い時にさまざまな恋を体験するが、やがて年が重なるると、どんな美女でも小町のなれの果てのように老醜をさらして死んでいくのだ、というもの。謡曲の「卒塔婆小町」の影響もあります。美少女の哀れさを人間の避けえない運命として「浮世の果ては皆」と一刀にして両断したところはいかにも芭蕉の句らしい力強さと技の冴えがあります。

⑩ さまざまの恋は馬刀貝（まてがい）

忘れ貝 支考

乞食となりて夫婦（めおと）かたらふ  
芭蕉

元禄四年十月 三河国新城にて

「馬刀貝」は二枚貝の一種。殻は筒状で砂泥を垂直に掘って生きています。「待つ恋」をもじったものです。「忘れ貝」は

二枚貝の離れた一片。拾えば恋しい思いが忘れられると考えられていました。

⑩の内容は、この世の恋のありとあらゆる経験を含めつくしたあげくに、恋する二人は物乞いの境遇にまで落ちぶれたが、それでも互いに心変わりせず愛し合っている、というものです。⑨の前句には「品かはりたる恋」とあるだけで具体的なイメージは乏しく感じられます。そのため、たぶん芭蕉は多様なイメージをもっている小野小町を登場させて付け句を完成させています。⑩の前句は「馬刀貝」「忘れ貝」と少なからずイメージに富んだ語があるので付け句では「乞食」「夫婦」と歯止めなく広がるイメージを押し込め、え込む付け句をしています。このバランス感覚が芭蕉の俳諧（連句）の基本なのでしょう。ただし、この⑩の芭蕉の付け句が何かまだ力が弱く感じたのでしょうか、この句に対して参加者の一人である芦雁は

さしむくる背中の雪を打ち払ひ 芦雁

と付けました。相手を気づかなくて背中の雪をお互いに払い合って暮らしている乞食の夫婦の姿です。情景がより深まっております、よい付けです。

⑪ 赤鶏頭を 庭の正面 惟然

定まらぬ娘の心を取りしずめ 芭蕉  
元禄七年九月 連衆は支考・惟然ら

一六九四（元禄七）年十月十二日、五十一歳の芭蕉は大阪の地で死を迎えました。⑩の句は最晩年の作といつてよいでしょう。

いちずに思いつめた恋にイライラしている娘の気持ちをなだめすかして、やつとその心を取り鎮めることができた、庭の正面には真紅の鶏頭が狂ったように咲いている、というのが⑪の句意です。

燃えるように赤い鶏頭の色は妖艶であると同時にどこか暗い影も感じさせます。恋の狂って思い乱れた娘がやつとことと心を取り静め奥の座敷に一人ポツンとして庭の正面に見える真紅の鶏頭を見つめる姿は何ともいえず鬼気迫る凄味があります。鶏頭は時けばどこでも咲く、庶民の草花です。その鶏頭が庭の正面に植えてあるのは格式ある家とはいえず、娘はおそらく農村の庄屋（名主）、本百姓といった階層の生まれと想像できます。

また鶏頭を灼熱した娘の恋心の象徴とみるとらえ方もあります。この娘のイメージに井原西鶴の「好色五人女」に書かれた「お夏清十郎」のお夏のそれが重なっていると指摘したのは東明雅さん。「お夏狂乱」のドラマを妖しく華やかさがあがり、しかも暗さも感じさせる赤い鶏頭で象徴的に描く。西鶴の小説が極彩色の浮世絵ならば芭蕉の句は略体の俳画である、という東明雅さんの指摘は注目すべき言葉でしょう。

# 隠された歴史(36)

満田 正賢

遣するが倭国の王子と礼儀のことで諍いを起こす。(旧唐書)

六四八年(貞観二年)

倭国王が再び新羅の遣唐使に上奏文をことづけてあいさつをしてきた。(旧唐書)

\*以降、遣唐使の派遣が続きます。

通説では当然ながら、遣隋使・遣唐使とも、日本書紀に記されているとおり、大和朝廷(近畿王朝)が行ったことだと考えています。

一方、古田史学では、隋書、旧唐書に記されている倭国は九州王朝であり、新旧唐書に記されている日本国が近畿王朝のことである。九州王朝から近畿王朝への政権交代があったと考えています。そして、日本書紀や元興寺縁起に記されている裴世清の近畿訪問は、隋代の出来事ではなく、唐初の出来事であり、国として認められていない一地方への訪問であったことから、旧唐書に記されなかったと考えています。そしてその仮説に関して複数の証拠を挙げています。

それに対し私は「遣隋使と遣唐使の遣使の主体は異なる。遣隋使は蘇我馬子が行ったことであり、遣唐使は近畿王朝が倭国(九州王朝)の遣唐使に配下として付いて行ったのだ」と考えます。

最初に考察するのは、倭王阿每多利思北弧の要請を受け大業四年(六〇八年、推古十六年)に倭国に派遣された、隋の

使者・裴世清の称号問題です。この問題は通説では軽視されていますが、古田史学の中ではかなり突っ込んだ研究がなされています。

古田武彦氏は「古代は輝いていたⅢ」の中で次の問題点を指摘しています。

「隋書に記されている裴世清の倭国派遣時の官職は『文林郎』であり、その官品(格付け)は大業以降『従八品』である。一方、日本書紀や元興寺縁起には裴世清の官職は『鴻臚寺掌客』となっている。『鴻臚寺掌客』は隋初に制定された開皇令では『正九品下』、唐令では『正九品上』の官品である。裴世清が『鴻臚寺掌客』という官職についていたことは、隋書にも新旧唐書にも記されていない。」

「日本書紀(推古紀)には裴世清が持参した国書を小野妹子が百済に盗み取られたという記事があるが、隋書によれば、裴世清は国書など携行していない。」

「日本書紀(推古紀)に記された記事は唐初に唐と近畿天皇家の間で行われた外交である。裴世清は、唐初に『文林郎』から『鴻臚寺掌客』に降格されたのである。(隋から唐への移行期には同様の例がある。)」

その後古田氏は、「法隆寺の中の九州王朝」の中で、次のように論を發展させています。

「裴世清はヤマトへは行っていない。(九州王朝の都に行っただけである。)」

「推古十五、十六年の記事は十年、十二年後の推古天皇の遣唐使記事を記したものである。」

古田説を補強する谷本茂氏の考察があります。(「隋・煬帝のときに鴻臚寺掌客は無かった」古田史学会報百三十四号)

「隋・高祖のとき、鴻臚寺に典客署が置かれ、掌客十人有り。とあり、開皇二年(五八二年)の令では典客署掌客を正九品と為す。とある。ところが、煬帝の治世になり、大業三年(六〇七年)の令で、多くの部署の改革が行なわれた。秘書省に設置した文林郎は二十人(従八品)、掌

撰録文史、検討舊事が担当と明記されている。つまり、当時の文林郎は、必ずしも散官(無任所)というわけではなく、職務の規定された職制であった事がわかる。文林郎は、煬帝のとき従八品、唐代になって従九品上の官であり、鴻臚寺掌客は煬帝より前が正九品下、煬帝のとき無し、唐代になって正九品上の官ということになる。唐代になって裴世清が文林郎のままであれば従九品上になったはずであるが、鴻臚寺掌客に移り正九品上の官に任ぜられたのであり、古田氏の指摘の通り、「隋代における外交実務経験(倭国派遣)

今回は、「遣隋使と遣唐使の遣使の主体が異なる」という私の仮説について掘り下げてみたいと思います。まず遣隋使と遣唐使について、年表でおさらいをします。

六〇〇(開皇二〇年)

阿每多利思北弧の使者が隋に来る(隋書倭国伝)

六〇七(大業三年)

阿每多利思北弧の使者が国書を携え、沙門数十人と共に隋に来る。(隋書倭国伝)、(日本書紀)

六〇八(大業四年)

裴世清が倭国に派遣され倭王に会う。(隋書倭国伝)、(日本書紀)

六〇八(大業四年)

遣隋使(隋書煬帝紀)、(日本書紀)

六一〇(大業六年)

遣隋使(隋書煬帝紀)

六一四~六一五(推古二年~三年)

遣隋使(日本書紀)

六三二(貞観五年)

倭国が朝貢。高表仁を倭国に派

を買われたものと思われる」のである。結論として、煬帝のときに（大業三年から隋末にかけて）「鴻臚寺掌客」という官の存在を隋書に確認出来ないという史料事実が判明した。」

これらの古田史学の研究は、通説に比べるとはるかに史実を掘り下げたものであるが、私はこの古田史学の従来説に対して、新しい知見を見つけました。それは石曉軍著「隋唐外務官僚の研究―鴻臚寺官僚・遣外使節を中心に」という本です。この本は二〇一九年三月に東方書店より刊行されています。上編「隋唐鴻臚寺と鴻臚寺官僚に関する研究」と下編「隋唐遣外使に関する研究」によって構成されており、隋唐時代の代表的な外務官僚である鴻臚寺官僚と遣外使節の、実態および関連構造や制度を明らかにすることによって、隋唐時代の外務官僚層の実際を探ろうとしている、五九二ページにわたる労作です。

石氏は、隋唐時代で判明している四二七名の遣外使節を特定し、その中の一三五名に仮官の官職が見つかったことを明らかにしています。本官と仮官の関係をについて、石氏は次のように説明しています。

「官僚たちが、外交使節として異国に遣わされる時、その官位は使節の地位や身分を示すだけでなく、直接には相手国に対する評価の度合

いを示し、ひいては派遣国の国際意識を推し量るバロメーターにもなりうる。それゆえ使節の官位の高低は、派遣側と受入側に対しては、同様に重要であり、極端に言えば、外交交渉の成敗と密接に関連する。」

「ところが、隋唐における遣外使節は、高官よりもむしろ中級ないし下級官僚から選ばれたものが多かった。したがって、遣使にあたっては、必要において臨時に使節の官位を上げることが重要な措置としてよく行われていた。」

「その場合には、一般に仮、兼、撰などの形で使節に適当な官職を仮授し、さらには可視的身分標識たる服色を賜授して、彼らを外国に送ったのである。言い換えれば、遣外使節の地位を上げる主な方法が、使節に対する仮官と賜位なのである。」

石氏はこの仮官の研究の中で裴世清の称号問題に触れています。

「隋の後半期において、遣外使節に対する仮官例は殆ど見られないが、ただ、大業四年（六〇八）の遣倭国使裴世清の官職について、『隋書』卷八十一『倭国傳』をはじめとする中国側の文献には、『文林郎』とあるのに対し、『日本書紀』卷二十一・推古十六年八月壬子条に載せている唐の国書には『鴻臚寺掌客』、『元興寺伽藍縁起』には『大随国使主鴻

臚寺掌客裴世清』と明記され、中国側の記事と明らかに食い違っている。この点については、従来いろいろな解釈があり、例えば、増村宏氏は、『裴世清はこの鴻臚寺所屬の四方館関係の係員になったことがあり、そのために来朝して『鴻臚寺掌客』と称したか、あるいはそうではなくて、『文林郎』より理解しやす、使節にふさわしい、『鴻臚寺掌客』を称したものか、と推測する。」

といい、また、池田温氏は、「派遣時の正式官名はこれ（鴻臚寺掌客―石注）であった。文林郎が散官もしくは学芸文筆の名譽職なのに比し、こちらは対外折衝の実務にたずさわる職事官であり、外国遣使の任務をおびたのもありうることである。」

と解釈している。両氏の推論の上で、さらに憶測をたくましくすれば、鴻臚寺掌客は王朝外交の実務を担当する官職であるので、使節の仮官として裴世清に仮授した可能性も無いことはない。言い換えれば、文林郎は彼の本官で、鴻臚寺掌客は出使時の仮官ではなからうか、と推測する。後述するように、唐代前半期における鴻臚の職がよく仮官ポストとして使節に仮授されていることをあわせ考えれば、これは隋の後半期と唐の前半期における使節仮官の重要な特徴であったようである。」

「鴻臚寺掌客」が「文林郎裴世清」の遣倭国使での仮官であったという仮説は、あくまで石氏の推測を出ないものですが、この仮説によって、遣倭国使の派遣が隋書に記された大業四年の裴世清一行と、旧唐書に記された貞觀五年の高表仁一行の二回だけであった、というシンプルな解釈が可能になります。しかし、そのようなシンプルな解釈を可能にするためには、裴世清の称号問題以外に古田史学内で取り上げられた問題点の合理的説明が必要です。

第一に、裴世清使節団一行の副使である遍光高の尚書祠部主事という肩書きについてです。この遍光高の名前は、隋書にも日本書紀にも記されておらず、元興寺縁起丈六仏後背銘にのみ記されています。

前述の谷本茂氏は、『尚書祠部侍郎』は隋初『開皇令』に正式に存在した職制。煬帝の大業三年に改めた大業令では、『禮部』大業四年に『祠部』が存在したとは必ずしも断言できない微妙な史料状況にあるが、唐代、『唐尚書省郎官石柱』には『尚書祠部』が存在したことが明記されている。少なくとも唐初には、存在していたことは間違いない。」と述べています。

一方石氏は、隋唐時代における尚書省・礼部について「礼部は、『天下禮儀、祠祭、燕饗、貢奉之政令』を掌る国家政務機関として礼部、祠部、膳部、主客と

いう四つの官署を管轄している。」と述べています。

石氏は、唐制は隋制の継承かつ集大成であったと考えるので、論述は唐代を中心にすると思いますが、隋朝の大業四年に『禮部』の下部組織として祠部が継続していたことについては疑問をもってはいません。

第二に、裴世清が読み上げた隋の天子の言葉の中に出てくる「宝命をうけた」という言葉の問題については、古田氏は「宝命」問題を「古代は輝いていたIII」において次のように指摘しています。

「推古紀十六年にある大唐の国書にある「朕宝命を欽承し」は、天命を受けた創始者の言葉であり、大業四年の煬帝（第二代）にはふさわしくない。一方、唐の第一代皇祖の言葉には「宝命」が使用されている。」

これに対し、古田史学の会事務局長の正木裕氏は『壹』から始める古田史学・三十一『多利思北弧の時代VIII』―『小野妹子の遣唐使』記事とは何か―において以下のような仮説を提示しています。

「裴世清が『無いはず』の国書を奏上したという話は、『倭国の阿每多利思北弧への奏上』を潤色し、『推古への奏上』に置き換えたものということになるでしょう。」

つまり、日本書紀・推古一六年（六〇八・大業四年）条に記載された、裴世清伝え

た隋・煬帝の奏上は、煬帝の奏上ではなく、六〇〇（開皇二〇年）に隋・文帝が阿每多利思北弧の使者に伝えた奏上を借用したものである、ということです。

この正木氏の仮説は、古田史学の従来説である「隋書に記された裴世清派遣の史実は九州王朝に対してなされたものであり、日本書紀に書いてある史実は新旧唐書には記されていないが、唐初における近畿王朝と唐との交流の歴史である」という仮説の上に立ったものですが、私は、「倭国の阿每多利思北弧への奏上」は隋の開祖である文帝に対してであり、文帝の返答に「宝命」が使用されているのは、不自然ではない。」という部分に関しては、正木説が正しいと考えます。なぜならば、考察の中の「九州王朝の使者への隋文帝の奏上」という部分を「蘇我馬子の使者への隋文帝の奏上」に置換えればつじつまが合うからです。

この「宝命」問題は、「裴世清が携えていた国書（または奏上の記録）は蘇我氏内に隠され（又は乙巳の変で焼かれ）、後の近畿王朝はそれを発見することが出来なかった。そこで仕方なく、小野氏に残る、蘇我馬子の使者たる小野妹子の隋文帝への奏上記録を改竄することによって日本書紀を編纂した。」と考えることによって解決出来ると思われれます。

## 「道をゆく」(30)

成瀬 和之

### 「熊野街道」(二七)

③松本峠から七里御浜・花の窟へ  
世界遺産が連続する、伊勢路で最も人氣のあるコースです。

JR大泊駅から大泊海岸を左手に見ながら、一〇分ほど下って行くと国道四二号線に合流します。その信号で国道を渡った所が松本峠登り口です。

登り口を入ってすぐ、杉林の中に階段状の石畳道が現れます。この石畳は江戸時代に整備されたもので、自然のままの石を使い、一気に古い時代へタイムスリップしたようです。急坂では隙間なく石を詰め、平坦部では間を広くとって敷いてあります。

松本峠は伊勢路最後の峠です。一三五メートルと高くはありませんが、登り口からいきなり急な登りが始まります。やがて平坦な道となり、周囲に竹が多くなると松本峠に着きます。一段高い所に等身大の地藏が迎えてくれます。江戸時代、大馬新左衛門という鉄砲の名手が妖怪と勘違いして撃ってしまったという弾痕が足下に残ります。かつて茶屋や寺もあったという峠は三叉路になっています。熊野古道はまっすぐに下るのですが、いったん左への道をとります。鬼が城へのハイキングコースなのですが、一〇分ほど行くと、休憩所になっている東屋にで

ます。ここは七里御浜や熊野の山々、そして熊野市街が見渡せる伊勢路きつての絶景ポイントです。伊勢より歩き続けた昔の参詣者は、熊野灘沿いに約二キロメートルも続く海岸線を見て、この先も峠越えはないという安堵とともに、美しい景色に見入ったことでしょう。

東屋からさらに進めば、戦国時代の鬼が城跡を経て、春は桜に彩られる道を下って「鬼が城センター」に出られます。センター前にはトイレもあり、無料駐車場が整備されています。鬼が城は国の名勝・天然記念物で、熊野古道伊勢路の一部として世界遺産にも含まれます。熊野灘に面する大岩壁・大洞窟の奇観に驚かされます。波に削られた大小無数の洞窟が約一キロメートルも続いており、遊歩道をたどって見学できます。熊野古道からは寄り道になりますが、充分楽しめるハイキングコースです。

話を松本峠に戻します。熊野古道の本コースは、東屋から引き返して松本峠を左折し、緩やかな石畳道を下ります。こちらの側の石畳は明治時代に造られたもので、加工した石を隙間なく並べています。石畳はやがて舗装路に変わり、さらに民家の間の石段を下って行くと松本峠の本木側登り口に出ます。その先の西郷川に架かる橋が笛吹橋です。橋の名は、平安期の征夷大將軍・坂上田村麻呂が「鬼が城」の鬼退治をしたという伝説に関係しており、橋の欄干に横笛を模した穴が

あけられています。

橋を渡ると、古道は熊野市の中心・木本(きのもと)町を貫く「本町通り」です。

古い造りの商家や民家が残り、風情を感じさせます。

道なりに進み、国道四二号線を渡って堤防を越えると、七里御浜に出ます。ここから新宮の手前の紀宝(きほう)町まで続く日本一長い砂礫海岸で「浜街道」とも呼ばれ、伊勢路の一部として世界遺産に登録されています。

花の窟まで七里御浜歩いてよいし、歩きにくければ国道を進んで少し行けば、獅子岩が目に入ります。熊野灘に向かって咆哮する獅子のような、高さ約二五メートル、周囲約二一〇メートルの奇岩です。鬼が城と同様に波や風に侵食されて形成された自然の芸術品です。獅子の口に当たるところに朝日が昇る写真を何枚も撮っては保存している大阪人に出会って、写真集を見せてもらいました。

さらに約一五分で「イザナミノミコトの御陵」との伝説のある花の窟(はなのいわや)神社に着きます。鳥居を潜り、原始林に覆われた参道を進むと岩壁に突き当ります。高さ四五メートルの巨岩が「花の窟」で、この神社のご神体です。社殿はなく、古代の自然崇拜の姿を今に伝えています。花の窟の向かい側には、高さ一二メートルの岩「王子の窟」があり、こちらはイザナミの子とされるカグツチが祀られています。

神社から有馬の町を歩いていけば、熊野市歴史民俗資料館を経てJR有井駅に行けます。

## マルクスから学ぶ(8)

成瀬 和之

今回から「経済の逆立ち」について考えていきましょう。

コロナ禍の下で、菅首相は八月二日、重症者と重症化リスクの高い患者以外は「原則自宅療養」とする方針を打ち出しました。その結果、「新型コロナウイルス感染症にかかっても入院できず、自宅療養中に命を落とした人が続出しました。政権による「棄民政策」の犠牲者です。もともと「経済」という日本語は「経世済民」から来ています。民を救わなくて、何が「経済」なのでしょう？「経済の逆立ち」です。

このような事態に至る背景には、東京オリンピックの強行もありますが、根本的には、新自由主義に基づく保健所・医療診療体制の削減がありました。では、「新自由主義」とは、一体何なのでしょう？

この四〇年、日本の社会では、競争と自己責任を強調する「新自由主義」の諸

施策が推進されてきました。格差と貧困の新たな拡大、雇用の不安定化、福祉・医療・文化・教育の商品化、生活圏としての地域の崩壊、日常の人間関係の分断と敵対化などの状況が極端なまでに進行してきました。人々の間には「生きづらい社会になっていく」という実感が広がっています。K・マルクスが、一九四四年に『経済学・哲学草稿』で既に「疎外された労働」、「疎外された人間生活」について指摘していたことをふと思い出します。

利潤の最大化(平たく言えば「金儲け」)を目的とする資本主義経済の下では、しばしば貧富の差や環境問題、そして恐慌などの資本主義社会の矛盾を引き起こします。そのため、一方では、資本主義社会の矛盾の解決をめざした社会主義・共産主義の思想がマルクスなどによって主張され始めます。

それに対抗するために資本主義体制内部で社会改良を図ろうと、政府が経済に介入する「修正資本主義」「有効需要創出」政策がケインズの考え方をもとに広がっていきました。

しかし、一九六〇年代後半から先進資本主義国の経済は、激しいスタグフレーション(不況とインフレの同時進行)に見舞われ、「大きな政府」による財政危機も表面化してきます。

そこで、ケインズの「福祉国家」や「大きな政府」を批判する新自由主義の経済

学がフリードマンらによって主張され出します。一九八〇年代に入って、イギリスのサッチャー、アメリカのレーガン、日本では中曽根首相によって導入されました。国家による経済への介入を減らし、再び「小さな政府」をめざす経済・社会政策です。市場原理に基づく競争を重視し、「自己責任」論で人々を包摂し絡めとる「市場原理主義」の思想です。

二〇世紀末になると、市場経済を否定する「計画経済原理主義」ともいうべきソ連・東欧などの経済がほころびを拡大し、ついにはソ連などが崩壊します。資本主義万歳論が一世を風靡し、「マルクスは死んだ」と言われました。

そのような時代背景の下で、二一世紀に入って新自由主義の政策は、小泉純一郎首相から加速されました。

古典的な自由主義は封建制や絶対王政のもとでの自由への制約の撤廃を主張しました。これに対し新自由主義は、資本主義の矛盾の拡大のもとでつくられてきた労働者や国民の人権を保障するための企業活動への規制の撤廃を主張します。「規制緩和」論です。

派遣労働をはじめとする非正規雇用の拡大で労働法制の規制緩和を進めることは最大の柱の一つです。また、所得税の累進制の緩和、法人税や社会保障の企業負担を安くする一方で、「逆進制」が強くなり、所得の少ない層に負担の大きい消費税を導入・拡大します。それと連動して

医療、介護・年金などの社会保障を大幅削減します。保健所、公立・公的病院の統廃合はその表れです。

強い者勝ちの「競争原理」を強め、これを広く国民に受け入れさせるためのイデオロギーが「自己責任」論です。資本の側からの現代版「反革命イデオロギー」といつて良いでしょう。

ミヒヤエル・エンデの『モモ』は「時間泥棒」（「灰色の男たち」は資本の象徴です！）によって「豊かな時間」を奪われる人々の様子を見事に描き出しています。

新自由主義の経済を根本的に理解しようと思えば、そもそも「逆立ち経済」の根源となる「資本主義経済とは何か？」を問わねばなりません。次回から「資本主義経済」について考えていくことにします。



## 俳句

土田 裕

大干潟汐の匂ひも秋めきぬ  
星飛びて政変ありし夜なりけり  
長き夜や救急処置を待つ廊下  
曼珠沙華昼の昏さを灯しけり  
おちこちの枝先の揺れ小鳥来る

影山 武司

木曾の香を茶巾絞りに栗の菓子  
朝顔の風を指揮する蔓の先  
星月夜爪弾く弦のアルペジオ  
居待月世界時計の針動き  
悔恨の深き色して山葡萄  
幼子の頬の膨らむ黒葡萄  
青空をこぼるるしづくマスカット  
秋茄子の艶めく胴のきゅつと鳴り  
ほろほると土の解くる落花生  
茹で上がる土の匂ひや落花生

## 【「ふみの道草」40の続きです】

### 結論

ダダがうなっていたけれども  
プロがうなっていたけれども  
エロがきしんでいたけれども  
グロがきしんでいたけれども  
芸術はタイハイしていたけれども  
ぼくらはタイハイしていたけれども  
ぼくらはタイハイしていたけれども  
ぼくらは  
たち上った  
たち上った  
たち上った

私はやはり、「死者たちに戦死者もいて門火焚く」とうたいたいと思う。それが、私が戦後を生きていることの証明のように思えるからだ。

### 編集後記

SK生

▼気づけば今年もすでに二十四節季中の「寒露」である。草木に冷たい露が降りる頃というが正直まだ暑い。言葉と現実とが合わない。季節のことであれば罪は少ないが、実社会でそうしたことが起これば問題である。▼「言葉の破壊」という事態が進んでいる。特にコロナ禍で政府から出される言葉にそれが目立つ。たとえば「自宅療

養」。本来はきちんとした診断や治療を受けた人が自宅で休むという意味のはず。それがいつの間にか入院できない人を自宅に放置同然にすることを意味する言葉となってしまう。この言葉の用法はまたにあふれ我々も慣れつこになっている。▼一人一人の人間とその周りにある世界をつないでいるのは言葉である。だから言葉が実際に起きていることを示さなくなると私たちは世界とのつながりを失い、本当は何が起きているのか見ることができなくなってしまう。民衆の目を真実からそらし、シンブルな言葉で、そして大声で何度も語ることによって人々を扇動するのは悪しき政治家の常套手段である。かつてはヒトラー、最近ではトランプ前大統領、みなしかり。▼言葉への信頼が崩れつつあり人々の不安も増えていきそうなき茨木のり子の「倚（よ）りかからず」という詩の次の一節は力強く胸に響いてくる。  
もはや  
いかなる権威にも寄りかかりたくない  
ながく生きて  
心底字んだのはそれぐらい  
じぶんの耳目  
なに不自由のことやある  
詩人は外部から入ってくる言葉に右往左往することなく自分の体験と感性からしつかりとした自己を作るのだという。「言葉の破壊」から自分を守る一方法であるにちがいない。

迎え火を焚けば見知らぬ仏来る

大分の俳人・成清正之氏の句である。私が川柳か俳句かわからぬような、

死者たちに戦死者もいて門火焚く

と詠んだとき、こんな俳句があると教えてくれた俳人がいる。「戦死者もいて」は、「俳句としては言い過ぎである」と。正之氏の句は想像を膨らませる句だと思う。しかし私が詠みたかったのは、戦後七十六年の今なお、門火を焚いて戦死者を迎えている人がたくさんいることだった。それは、私がそうであったように、父や伯父あるいは兄弟などの身近に戦死者がいなければ、もはや忘れがちな事実だと気がついたからである。

二億年銀杏は銀杏戦せぬ国のかたちはまだ七十年

戦後七十年の節目にそんな歌をうたったところで、肝心なところはすぐにも忘れて仕舞う私なのだ。時代は変わった、安全保障をめぐる世界の環境は変わってしまった、憲法だけ変わらないのはおかしいではないか、という声が政府から聞こえて来るとき、そんなことではとても抵抗できないだろう。

そんな次第で、四十年近く前に出合った一つの詩を書き留めておこうと思った。一九二二(大正十)年に生まれ、一九四〇(昭和十五)年に念願の日本大学専門部(現芸術学部)映画学科へ入学したものの、一九四二(昭和十七)年九月繰上げ卒業で応召、一九四五(昭和二十)年四月比島バギオ北方一〇五二高地で戦死した竹内浩三の詩『骨のうたう』である(小林察編、竹内浩三全集1『骨の唄う』(株)新評論、一九八四年)。

骨のうたう

竹内浩三

戦士やあわれ

兵隊の死ぬるや あわれ

遠い他国で ひよんと死ぬるや

だまって だれもいないところで

ひよんと死ぬるや

ふるさとの風や

こいびとの眼や

ひよんと消ゆるや

国のため

大君のため

死んでしまふや

その心や

苔いじらしや あわれや兵隊の死ぬるや

こらえきれないさびしさや  
なかず 咆えず ひたすら 銃を  
持つ

白い箱にて 故国をながめる  
音もなく なんにもない 骨  
帰っては きましたけれど  
故国の人のよそよそしさや  
自分の事務や女のみだしなみが  
大切で

骨は骨 骨を愛する人もなし  
骨は骨として 勲章をもらい  
高く崇められ ほまれは高し  
なれど 骨はききたかった  
絶大な愛情のひびきをききた  
かった

がらがらどんどんと事務と常  
識が流れ

故国は発展にいそがしかった  
女は 化粧にいそがしかった

ああ 戦死やあわれ  
兵隊の死ぬるや あわれ

こらえきれないさびしさや  
国のため

大君のため

死んでしまふや  
その心や

浩三はまた、こんな詩も書いていた。

大正文化概論

序論

G線の下で  
アリアをうたっていた  
てるてる坊主が  
雨にぬれていた

本論

交通が便利になって  
文化はランジュクした  
戦争に勝って  
リキユウルをのんだ  
はだかおどりの女のパンツは  
日章旗であった  
タケヒサ・ユメジが  
みみかくしの詩をかいた  
人は死ぬことを考えて  
女と遊んだ  
女と遊んで  
昇天した  
震災が起こって  
いく人もやけ死んだ  
やけ死ななかったものは  
たち上った  
たち上った  
たち上った  
ボクらのニッポンは  
強い国であった

【以下「結論」の部分は15ページの中段にあります】